慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伊藤論文への論評
Sub Title	Some comments on Prof.Ito's essay
Author	岡田, 直之(Okada, Naoyuki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2006
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.56 (2006. 3) ,p.29- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20060300-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伊藤論文への論評

岡田直之

馬であれ，犬であれ，他のどのような動物であれ，気概のないものが勇敢であることができるだろうか？君は気づいたことがないかね―気概というものがどれほど抗しがたく打ち克ちがたいものであって，それがそなわっていれば，どんな魂でも，いかなる事柄に直面しても恐れず，不屈であるということに？（プラトン，藤沢令夫訳『国家』（上）岩波文庫，1979年，148頁）

プラトンにおいて，正しい人とは理性的部分，気概的部分，欲求的部分という魂の３つの部分が，知恵，勇気，節制というそれぞれの徳をまもりながら，全体としての調和のとれた人間であった。（藤原保信『自由主義の再検討』岩波新書，1993年，55頁）

▶1　はじめに

この論評は，伊藤論文への網羅的・体系的な論弁を意図したものではない。そのような緊張度の高い取り組みを目指すよりも，むしろ肩の力を抜いて断片的な所思や断想の一端を思いつくままに綴ったにすぎないことを，はじめに釈明しておきたい。

国際的に高い評価を得ているジェームズ・ワットソンとアン・ヒル編著『メディア・コミュニケーション研究辞典』の第５版（2000年）は，伊藤陽一教授が1998-2000年にかけて国際コミュニケーション学会（IAC）などで数度にわたって発表し，欧米のメディア・コミュニケーション研究者の注目と関心を集めたコンセプトである*kuuki*を，2000年の第５版に新項目として収載した。

日本のメディア・コミュニケーション研究者の多くは少なからず驚喜し，惜しみない拍手を送ったと思われる。とにもかくにも日本のメディア・コミュニケーション研究の優れた成果のひとつが国際的なお墨付きを博したからである。その新項目の記述がどんな内容であったかは第５版をお読みいただくほかないけれども，編著者が『ジャーナル・オブ・コミュニケーション』誌（1993年秋季号）掲載の伊藤論文だけに依拠して解説していたので，はなはだ散慢であったことは否定できないだろう。伊藤は恐らく隔靴掻痒の感を抱いたに相違ない。

まことにタイミングよくこの『辞典』の第７版の原稿が伊藤教授に送られてきたので，その原稿（第５版の解説に比べると，著しく分量も増えたのみならず内容も改善されている）を下記に翻訳することにしたい。

*kuuki*とは，中国人や朝鮮人も使用している日本語であって，服従を強要する意見の風土（a climate of opinion）を意味している。1993年秋季号の『ジャーナル・オブ・コミュニケーション』誌に掲載された「政治コミュニケーション研究の将来―日本的視座―」と題した論文で，慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの伊藤陽一教授は，「空気」は一般性（generalities）ではなく，個別性（specifics）を意味することを力説している。W. グーディクンスト編『コミュニケーションズ年鑑』第26巻（W. Gudykunst,

ed., *Communications Yearbook*, No.26, 2002）掲載の論文「意見の風土・空気・民主主義」のなかで，伊藤教授は，服従への圧力である「空気」は『特定の意見・政策・集団決定』のことで，通例『脅迫と社会的制裁』を伴うと述べている。

伊藤が指摘するように，「意見の風土」という用語は歴史が古く，恐らくイギリスの哲学者ジョセフ・グランヴィル（Glanville, Joseph, 1638-80年）が17世紀に最初に使用した。伊藤はこの言葉がドイツ語の「時代精神」（Zeitgeist）に対応すると示唆している。かれは日露戦争（1904年２月-1905年９月）の事例を引用して，当時（1904年）の意見風土が日露戦争への大衆の熱狂的支持の一因であったと述べている。1904年初頭に開戦論を唱えた新聞が劇的に広がり，他方反戦論を支持する新聞は衰退の一途をたどったといわれている。

「空気」は時代精神と同じように，肉体（the corporeal）であるよりも精神（スピリット）であるので，予見不可能だし，慣習醸成装置と同様に統制不能である。しかし，意見風土が正当であるなら，「空気」は威力を発揮し，国家を引っ張ることができる。ここで伊藤はエリザベス・ノエレ＝ノイマンの「沈黙の渦巻き説」との強い関連性を見て取っている（ノエレ＝ノイマンの「沈黙の渦巻き世論モデル（1974年）を参照せよ）。

ひとたび服従を強いる意見風土が集団・コミュニティ・国家に広がると，その時代精神が同調行動を促すのである。自由に自分の意見を述べていた個人は孤立化・脅迫・危険を感じ取って，自分の殻に閉じ込もるようになる。また，つぎのように結論づけることもできるかもしれない。時代精神に同調するマスメディアはそれを肯定したり，逆に世論の渦巻きを逆転させ，それを正当化し補強する雄叫びをあげるようになると。

「空気」はよい方向にも悪い方向にもアンヴィバレンツ（両義的）に作用する。盲目的愛国主義（Jingoism）によって焚き付けられると，「非民主的で破壊的になりうる」。「もっとも危険な事例は，『空気』を非民主的な集団や利己的で不寛容な政治指導者が手前勝手に利用することであり，これほど悪い状況でないときでさえ，『空気』は人びとの視野を偏狭にし，政策選択を限定することができる」と，伊藤教授は叙述している。

「空気」はマスメディアと政府と世論の強弱という三者の連関によって，どのように醸成されるかについて，伊藤は仮説を提起している。三つの行為主体は相互に影響を与え合い，三極的連関のなかで他のものに影響を及ぼす。三つの主要な行為主体が連携ないし同盟する場合，その支配的なパートナーシップが第３者の行為主体（the third actor）を戦列に引き込むことができる。伊藤は「空気」が強力な効果をもつ五つの条件を列挙している。すなわち，(1)多数意見が政府・マスメディア・公衆（世論）の三者のうち２つ以上で多数を占めるとき，(2)多数意見が三者において多数を占めるとき，(3)多数意見が次第に増勢するとき，(4)多数意見がエスカレート（急上昇）するとき，(5)論争の的になっている主題が個人に内在する基底的価値観・規範・偏見・敵対意識・集団への忠誠心・愛国心などといった「スピリット」（精神）を掻き立てる傾向があるとき，にほかならない。

こうした諸条件が満たされて「空気」が醸成されるとき，空気は強力な政治力あるいは社会力として機能し，少数派は一層沈黙し黙認するようになるか，自分の立場・主張を断念して支配的政策選択に足並みをそろえるようになる，と伊藤は言明している。

▶２　空気概念の定義づけの試み

伊藤は空気パラダイムの着想を山本七平の著書『「空気」の研究』から得ている。山本は「空気」の概念を明確に定義づけておらず，多彩な具体例を引き合いにだしながら，

その著の全編にちりばめるスタイルに徹している。

山本はみずからの書物を「奇妙な研究」と記しているが，「空気」の概念も瓢箪鯰のようにつかまえどころがない。つかまえどころがない概念であるところに，この概念のこの上ない妙があり，概念の存在意義があるのだろう。山本の空気概念のエッセンスと思われるものをいくつか抜き書きすると，下記のようになる。

「人は確かに，無色透明でその存在を意識的に確認できにくい空気に拘束されている。従って，何かわけのわからぬ絶対的拘束は『精神的な空気』であろう」。

「それ（空気）は教育も議論もデータも，そしておそらく科学的解明も歯がたたない“何か”である」。

「それ（空気）は非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ『判断の基準』であり，それに抵抗する者を異端として，『抗空気罪』で社会的に葬るほどの力をもつ超能力であることは明らかである」。

「われわれは常に，論理的判断の基準と，空気的判断の基準という，一種の二重基準（ダブルスタンダード）のもとに生きているわけである。そしてわれわれが通常口にするのは論理的判断の基準だが，本当の決断の基本となっているのは，『空気が許さない』という空気的判断の基準である。（中略）この二つの基準は，そう截然と分かれていない。ある種の論理的判断の積み重ねが空気的判断の基準を醸成していくという形で，両者は，一体となっているからである」。

「『空気』は，……人工的操作によって作られるものでなく，言葉の交換によって，無意識のうちに，不作為に，いわば自然発生的に醸成されるから『空気』なのだが，それは，ある種の意図を秘めた作為的な『人工空気』の醸成が不可能だということではない。従って，この『人工空気醸成法』を調べていけば，『自然発生的空気』の成立過程も少しはわかるであろうと思われる」。

「『空気』とは，一つの宗教的絶対性をもち，われわれがそれに抵抗できない“何か”だということになる」[1]。

伊藤は，あたかも独楽ネズミのようにあちこちぐるぐる動き回る山本の空気概念に振り回されることなく苗床として活用しながら，空気概念をこう定義づけている。「特定の意見・政策・集団決定への服従を要求する社会的・政治的・心理的重圧であって，通常威嚇・社会的制裁を伴う場合に，日本語で空気と呼ばれている」[2]。

伊藤は続けて，「同様の概念は昔から世界中に存在してきた。だが，この言葉は学術用語ないし準学術用語として日本で最初に用いられ始めた」と述べている。はたして，こう断言してよいかどうかはもっと思慮深い検証が必要ではないかと思う。率直にいって，この点については，伊藤の思い込みが強すぎて，近現代史上のよく知られている歴史的事例を挙げて論証しようと努力しているものの，十分な説得力をもつとはいえないだろう。

そのことはさておき，伊藤が山本の評論的・ジャーナリスチックな空気概念を社会科学上の概念に転成しようと努めたことは間違いない。

▶3　空気概念が学術専門語になれなかった理由

伊藤は，空気の用語がジャーナリズム・マスコミ界で通用されていたにもかかわらず，山本に端を発した空気概念が社会科学の学術専門語にならなかった理由として，3点を挙げている。

(1) 山本はもっぱらこの概念を日本に固有な社会事象であると説明し，日本以外の諸国における同種の事象への適切な目配りを怠ったために，アカデミックな研究者は世界に通用する普遍性・適用性を有する概念とは見なさなかったこと

（2）山本は社会評論家で社会科学者でなかったので，かれは空気を測定したり数量化しようなどとは毛頭考えていなかったこと
（3）山本は名うての反マルクス主義的・反左翼的な社会評論家だったため，マルクス主義的・左翼的学者は一顧だにしなかったこと

これらの３つの理由のうち，第１点をめぐっては，空気概念が世界に通用する普遍性・遍在性を備えているという伊藤の年来の所説と対立する。

第２点の理由が実証主義者である伊藤の反論意識を焚きつけ，空気説の経験的分析という新らたな課題への挑戦におもむかせたのだ。この挑戦的課題に取り組んだ結果，伊藤は空気概念を「価値中立的概念」（a neutral concept）に仕立て直すとともに，空気研究を実証主義の軌道にのせる道筋を開いたのである。

第３点については，伊藤は山本の見解に賛同している。だが，私見によれば，たしかに敗戦直後から1960年に至る時期でマルクス主義者やいわゆる進歩的文化人が羽振りを利かせた状況があったにせよ，そのことが空気概念の受容への実質的障害になったとはいえないであろう。日本のマルクス主義者の大半がそれほど教条主義に凝り固まっていたとは思われない。

▶４　伊藤論文の優れた点

思いつくままに，淡々と箇条書きにする。
（1）類縁概念との異同を丹念に検討する概念整理を行ったこと
（2）「西洋的人間観か東洋的人間観か」「性善説か性悪説か」「自律か他律か」「服従か調和か」「迎合か同心（時空の共有感情）か」「論か証拠（データ）か」「価値規範か客観性か」「定量分析か定性分析か」「内側の目か外側の目か」「ジャーナリズムかアカデミズムか」「西洋的個人主義か日本的集団主義か」などのいずれかの二者択一ではなく，いずれも同時的・複合的に包摂した複眼的・重層的アプローチを方法論的に採用していること(3)
（3）評論的・ジャーナリスチックな性格に染まった空気研究を社会科学の学問的土俵にのせ，胚芽的であれ，空気概念の測定可能な操作概念化とその具体的な測定方法とを考案し，概念の妥当性の検証を試みたこと
（4）空気概念を日本的特殊性・独自性の分析枠組みに閉じ込め，そのことを誇張するのでなく，いずれの社会・地域においても見られる文化的差異を超えた普遍的な事象として把握しようと意図していること(4)
（5）今回の論文ではかならずしも明確に論及されていないけれども，今後の重要課題として他国・他地域の国民性や異文化と密接に絡む「空気の比較文化研究」を推進することで，空気研究の一層の深化拡大をはかり，望むらくは社会科学の確固たる研究分野としての市民権を確立したいとの並々ならぬ意欲を秘めていること
（6）現代メディア社会の空気事象では，マスメディアによる共時共振や思考・行動伝播や集団的順応志向や集団的浅慮（groupthink）のメカニズムが決定的重要性をもち，必要不可欠の条件であることを力説していること
（7）一方で空気事象のはらむ危険な罠や否定的契機を見抜き批判的検討を加えるとともに，他方で空気事象のはらむ肯定的・積極的局面にも注意深く言及し，空気概念の両義性をしっかりと押えていること

伊藤論文の優れた点に関する上記の総括が当を得たものかどうかわからないが，伊藤

の進取的な研究業績のポイントをほぼ網羅できたのではないかと思っている。いずれにせよ，伊藤は空気の社会科学的研究へのひとつの里程標を打ち建てたといえよう。

▶5　3極空気モデルの提唱

3極空気モデル（Tripolar Kuuki Model）は未定のプロジェクトであるにせよ，伊藤がもっとも力を入れて取り組み，自信に満ちた問題提起であったと思う。だが，このモデルはかならずしもかれの創見とは言い難い。というのは，辻村明がすでに「政府・新聞・世論の3極関係」の分析モデルを提示していたからである。伊藤が辻村論文からなんらかの示唆を得たことは疑うべくもないだろう。もちろん，伊藤の3極空気モデルが辻村の3極構造パラダイムの単なる焼直しにすぎないといっているのではない。

伊藤の3極空気モデルが辻村の3極構造パラダイムの二番煎じでないなら，両者の違い目はどこにあるのか。それは，3極空気モデルがノエレ＝ノイマンの沈黙の渦巻き理論とM. マコームズ，D. ウィーバーのアジェンダ設定理論との研究成果を直接間接に摂取して構築されている点である。こうして，伊藤は辻村の分析パラダイムを一歩前進させたといってよい。

伊藤によれば，つぎの5つの条件ないしメカニズムの下で，社会の空気は絶大な影響力を振うという。

（1）政府とマスメディアと世論の3対幅の要因のうち，2つ以上の要因が連携して多数意見を形成する場合
（2）3つの要因がそれぞれ個別に多数意見を形成している場合
（3）多数意見が時の経過とともに増大する場合
（4）多数意見の強度がますます強化しつつある場合
（5）時の話題・争点が基本的価値観・規範・偏見・敵対感情・集団への忠誠心あるいは愛国心など個人に内在する“スピリット”を掻き立てる傾向がある場合

この5つの条件の抽出は客観的データを踏まえたストイックで手堅い経験的一般化の試みとして共感でき，高く評価できるだろう。

▶6　結びに代えて―問題点・批判点を含めた今後の課題―

「無い物ねだり」の感があるかもしれないが，いくつかの所見・提言を列挙して締めくくることにしたい。

(1) 空気説を論究するさい，どのような人間性の本質や人間観を想定するかが論議の前提であるはずだ。それなのに，空気の操作概念化に力点が置かれたため，この根本問題をなおざりにしてしまった嫌いがないだろうか。もちろん，この永遠のテーマに軽々に踏み込むのは愚の骨頂であるとしても，また伊藤がこの問題をまったく無視しているわけではないが，社会的少数派の有理抵抗とか個人に内在する生来の心理的リアクタンスなどのポジティブな行為論的側面がもっと重視されてもよかったのではないかと思う。

(2) 空気説の妥当性を裏付ける歴史的典型の例示が全般に恣意的で，歴史的レビューとしての甘さがあるとの感を拭いきれない。もっと系統的に練り上げなければなるまい。この課題は単に歴史的典型のラインアップの組み替え・差し替えといったことにとどまらず，歴史とどのように向き合い，かかわるのかという歴史研究の在り方と深く関連すると思われる。社会学者やコミュニケーション研究者が軽々に踏み込むことのできない

重い課題であるとしても，手に負える限りの取り組みは必要だろう。
(3) 同調行動あるいは同調性の概念のもっと精密な学問的検討も不可欠である。従順・服従・盲従・強要・強制・隷従・従属・強迫・迎合・他律などの紛らわしい類縁概念の異同性を究明する心理学的・社会心理学的検討が不毛な観念論的考察に落ちいらない限りにおいて必要である。
(4) 日本人のコミュニケーション様式を特徴づけている「沈黙」の意義や役割についても，探究の視野を広げることが伊藤論文の副題「日本の見方」に沿うのではないか。日本だけでなく西洋の有名な俚諺にも「沈黙は金，雄弁は銀」があるし，「言わぬは言うに勝る」「言わぬが花」「口を聞かぬが最上の分別」など，「沈黙」という非言語的コミュニケーション様式に関する精察は，沈黙の渦巻き理論の一面性への反論としても役立つであろう。
さらに，「目は口ほどにものを言う」とか「察し」とか「以心伝心」とか「不立文字」などのように，言葉を介さずに心と心が通じあう身体的・非言語的・禅的コミュニケーションの世界にまで立ち入っていくなら，もっと日本らしいコミュニケーション様式の特性を浮き彫りにできるに違いない[5]。
(5) 最後に，いささか思い付きの提言であるけれども，空気説の理論的地固めとして「世間体」の研究が大いに役立つのではないかと思う。世間体研究は豊沃な知的鉱脈を蓄えた研究分野であるからだ。
世間体研究として多くの人の念頭に浮ぶのは，井上忠司の『「世間体」の構造―社会心理史への試み―』(NHKブックス，日本放送出版協会，1977年）であろう。井上は世間体の社会心理のメカニズムを，こう説明している。「規範にしたがわずに行動すれば，私たちはきまって，ひろい意味での『制裁』(処罰，非難，嘲笑など）をうけるのがつねである。ところが，いったん規範が個人のなかに内面化されると，私たちは無意識のうちに，制裁をあらかじめ回避しようとするであろう。社会的規範は，社会的事実として，人間の行動を〈外がわ〉から規制している。と同時に，それは，心理的事実として，人間の行動を〈内がわ〉からも規制しているのである」(傍点原文)[6]。井上の世間体に関する社会心理学的説明とノエレ＝ノイマンの沈黙の渦巻き理論のロジックとは交差するといってよい。
井上はさらにマスコミと世間体との関係について，つぎのように述べている。「『世間』が，……ますます漠然とした存在となればなるほど，多くの人びとは，比較的確固たる，なんらかの共通性をもった適応規準にコミットしようとするであろう。『ひろい世間』の適応規準が，いまや，マスコミによってつくり出される〈世論〉にもとめられるようになったとしても，いささかも不思議はないのである」[7]。この井上の見解は紛れもなくマスコミのアジェンダ設定機能と一脈通じている。
空気研究が世間体研究とどう切り結び，交錯し，連結するのかについては，現在の私にはまったく成案はない。ひとつのトライアン・バルーンとして受け取っていただければよい。
さらに付け加えると，空気研究は濱口惠俊の間人主義（contexualism）あるいは方法論的関係体主義の分析パラダイムから多くの刺激的な示唆や知見を学ぶことができることを力説しておきたい[8]。いまここで，この問題を詳述できる研究蓄積がないので，必須のリファレンスであることを指摘するだけにとどまらざるをえないが，両者は深く結びつくはずだ，と私は考えている。

以上，日本社会のスタンダードからすると，かなり過激と思われる問題点の指摘や批判もあって，私は決してフレンドリー・コメンテーターではなかったが，空気研究の今後の発展に寄与できるなにがしかのシーズ（種子）を蒔けたのではないかと念じながら擱筆する。

●謝　辞

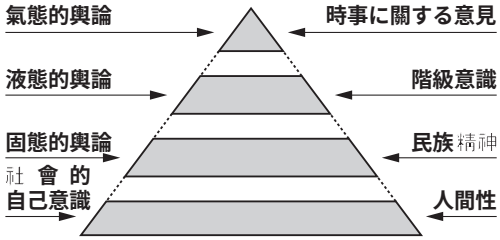
伊藤と私は数度にわたって書簡のやりとりを交わした。かれは私の質問・疑問に丁寧に応答してくれたので，解説・論評を書くのに大いに裨益した。かれの誠実な応対に厚くお礼を申し上げたい。

●注

1．山本の空気説を通読しながら，私は反射的にF. テンニースの「固体的世論」「液体的世論」「気体的世論」の３類型を想起し，あわせて日本のマスコミ研究史に照らして小山栄三の「世論の構造」（小山栄三『新聞学原理』同文舘出版，1969年）を連想した。小山は，テンニースを下敷にして「世論といわれるものの精神構造は，固定的，液体的，気体的（またはガス体的）の三重の層位を形成している」と叙述している。山本の空気説と小山の気体的・ガス体的世論説とは明らかに交錯し重複している。

　なお，小山の輿論図式を参考までに添付しておく。

輿論の本質



2．山本の空気概念を，どう解読し，まとめるかは十人十色であって，決定版は存在しないだろう。山本の空気説を踏まえての伊藤の空気概念の定義づけへの試みは今後の検討素材として役立つに違いない。

　参考までに私の差し当たっての概念化を試みるなら，いささか評論風だが次のようになる。「空気とは風の吹き回し次第で，いかようにも雲集霧散する風説・風評を意味する。一般に民衆の深層心理に宿る不安・恐怖・疑心暗鬼・憎悪などを呼び覚ますので，人びとは思考・行動様式の祖先返りに依拠することで，その心的ストレスを解消しようとする。別言すれば，社会通念・常識の大枠で判断・行動基準を切り盛りするところに顕著な特徴がある。従って，『空気』なるものは，内面化された道徳・価値規範・信条に基づく社会秩序への自覚的適応行動とは対蹠的である」。

　また，空気説への有効な切り口として，小集団（スモール・グループ）のレベルと大衆（マス）のレベルという２つのレベルを設定して，その検証を行うのが良いと思う。

　小集団は政治エリートの側近やシンクタンクとしての専門家（エクスパート）集団から一般市民の身近な日常的小集団まで幅広い範囲を想定する。場面情報としての空気支配力や拘束力は政治エリート層になるほど強くなり（仮説命題１），一般市民の小集団に下降するほど相対的に弱くなり，制裁や仲間はずれ・社会的孤立などの社会的サンクションはそれほど厳存しないと推察される（仮説命題２）。

　こうした２つのレベルを区別して，空気説の実証的研究に取り組むことが恐らく生産的であろう。

3．今回の伊藤論文では取り上げられていないが，「西洋的個人主義vs.日本的集団主義」の論争をめぐって，伊藤はステレオタイプ化された日本的集団主義の誤謬を槍玉に挙げている。伊藤陽一「メディアの歴史と社会変動」関口一郎編『コミュニケーションのしくみと作用』大修館書店，1999年を参照されたい。

4．伊藤は９月５日付の私信で，長年にわたるみずからの基本的研究姿勢を吐露している。「我々としては，日本的なものと（現在の国際市場で）普遍的なものとをうまく混合させて，勝負していかざるを得ないと思います。（中略）『文化的差異』というものはすべて程度の差に過ぎず，『日本的』と言われるものでも，他文化の中にも存在しているのだが隠れている，見過ごされているという場合がほとんどだと思います」。私信ということもあって粗削りのところがあるけれども，はなはだ興味深い見解である。

5．伊藤は「以心伝心」を重視する伝統的なコミュニケーション観は時代錯誤もはなはだしいと，つぎのように強く批判している。「昔のような「以心伝心」型コミュニケーションはますます成立が難しくなっており，すべては論理的に，明快に言語化しなければ個人間コミュニケーションは成り立たなくなってきている」。伊藤陽一「メディアの歴史と社会変動」関口一郎編前掲書，53頁。

6．井上忠司『「世間体」の構造―社会心理史への試み―』NHKブックス，日本放送出版協会，1977年，「はじめに」i頁。

7．同書，102頁。

8．①浜口恵俊『「日本らしさ」の再発見』講談社学術文庫，1988年。②同『間人主義の社会　日本』東洋経済新報社，1982年。

（岡田直之　元東洋大学・成城大学教授）